

ちょっと ブレイク しませんか?



第 32 回 「最強のふたり」 [2011年 仏蘭西]

イソップ寓話に「旅人と斧(おの)」と題する小話がある。

二人の男が一緒に旅をしていた。一人が斧を見つけたので、もう一人が「俺たちは見つけた」と言ったところ、初めの男は「俺たちは見つけた、ではなく、君が見つけた、と言うべきだ」と注文をつけた。しばらくすると、斧をなくした人たちが追って来た。斧を持つ男は追いかけて、道連れに向かって「俺たちはもうだめだ」と言ったところ、こちらの男が言うには、「俺たちは、ではなく、君がもうだめなんだ。君は斧を見つけた時だって、僕と共同にしなかったくせに」

不慮の事故で頸髄損傷となった大富豪フィリップは、秘書のマガリーと共に自分の世話をしてくれる住み込み介護者を探していた。そこに、移民の黒人のドリスが失業保険目当てに、不採用を承知で面接を受け来た。介護歴も看護師の資格もないドリスは、フィリップを身障者として扱う他の応募者とは異なり、気安くフィリップに接する。その態度に好感が持たれ採用される。重労働の介護に2週間ももたないと予測されたが、ドリスは介護者として仕事をこなしていく。ある夜、フィリップは薬による発作を起こす。ドリスはフィリップが落ち着くまで待ち、また発作が起こった時に外の空気を吸わせるために外出する。そこで、落ち着きを取り戻したフィリップはドリスと面白おかしくお喋りし、ドリスを正式採用する。毎年恒例の型にはまった誕生日会も、ドリスがいることで意外性を孕む。ドリスの横にいるとフィリップの単調で退屈だった毎日に新鮮な変化が起き始める。しかし、楽しい日々も長くは続かない。ドリスの弟のアダマが不良仲間に傷つけられ、ドリスに助けを求めようとフィリップの家に来て来たのだ。その時フィリップはふと考える。ドリスにはドリスの責任があり、自分の世話だけやり続けるのはあまりに可哀想だと。フィリップはドリスに辞職を勧め、ドリスはそれに応じた。ドリスから離れたフィリップは、新しい介護者を雇う。しかし、自分を障がい者として扱う差別的態度にフィリップは立腹する。新しい介護者の世話になるのが嫌で、髭も剃らなければ、夜に発作が起こっても頑なに介護させない。そんな様子を見かねたドリスの元同僚のイヴォンヌは、ドリスに電話をかける。ドリスは以前フィリップが夜に発作が起こった時と同様に、外の空気を吸わせるために一緒に出かけるのだった。

「最強のふたり」は、脊髄損傷の大金持ちに介護を越えた心身のケアをなんと10年も続けた移民で犯罪歴のある黒人が仏蘭西で生きる糧を得るといふシンデレラボーイ物語でもある。

2016年7月26日「生きる価値がない」と重度重複の障がい者を大量殺戮するという事件が相模原市で起きた。ナチズムの再来とも云える歴史的蛮行だ。「五体不満足」という本で「障がいは不自由だが不幸ではない」と書いた青年の愛人暴露記事は注目に値しない。何故なら障がいがいなくても愛人を困っている金持ちはあちこちにいる。イソップは「旅人と斧」の寓話で「幸運の分け前にあずからなかった人は、災いに際しても確かな友とはならぬ」とエゴイズムを乗り越えた連帯感を健常者に教えている。

障がい者基本法、雇用促進法などが施行されすべての人間は共生する権利を有するという社会理念が打ち立てられた。ホーキング博士でも名もない障がい者でも優劣はない。障がい者もまれに他人に迷惑をかけることがある。社会参加する権利と他者を脅かさない義務が障がい者にもある。驚いたことに、二十一世紀になっても、障がい者への理解が不十分な人が存在していた。この国が医療と福祉の面でも後進国と批判される所以だ。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長